

アジア学院「ワークキャンプ」

二〇〇九年八月三十一日から九月二日にかけて、那須塩原市にあるアジア学院でワークキャンプを行いました。九回目となる今回は、学生二十一名、教職員三名が参加しました。

アジア学院は、アジアやアフリカなどの農村地域で草の根として活動する農村開発従事者を学生として招き、農村指導者を養成する学校です。人種、性別、宗教など様々な背景を持つ人たちがそれぞれの価値観の違いを尊重し、自給自足を基本とした生活をしながら、公正で平和な社会を実現するため

の実践的学びを行っています。

初日は台風に見舞われましたが、それも一つの貴重な体験でした。アジア学院の方々にも支えていただき、三日間という短い日程ながら密度の濃い充実した時間を過ごすことができたと思います。学生たちは、今回のワークキャンプを通じて食べ物といのちの関係、豊かさとは何か、そして自分の可能性や果たすべき役割などについて深く考えることができたようです。今後はそれを実践に移すことが期待されます。

(教養学科専任講師 武田 美亜)

アジア学院で学び得たこと

子ども学科一年 野 末 紅 亜

私はこのアジア学院でのワークキャンプを通して、学び得ることが多くありました。普段普通に食べている作物を作るまでには、沢

山の苦難があり、多くの人の手によって作られているということを再確認することができました。台風で稲や木が倒れてしまっ

て、それを起こす作業をしたときに、自然の動きを真っ向から受けて、対処をしていくという農業の大変さを感じる事ができました。ワークを体験して、印象に残った言葉がありました。アジア学院では、フードライフワークという言葉を大切にしている、その言葉をベースにして生活しているということがわかりました。食べ物と生活は決して切り離すことができないものであって、実際に見て体験し説明を聞く

中で、命の循環について肌で感じることができ、本当に凄いことだということを感じました。自分が普段食べているものができるまでの仕組みを詳しく知ることができました。

アジア学院で、多国籍の方との交流を通して、英語の大切さを強く感じました。様々な国の人たちがいて、その中で過ごすことはとても新鮮に感じられました。しかし、質問をされても答えることができず、とてももどかしく感じ



コーヒー豆の選別作業

した。朝の集いの中で皆で歌を歌ったときは、本当に楽しいと感じました。言葉の壁を越えて、一緒に空間にいることの楽しさが味わえたひと時でした。でもやっぱり、英語ができるに越したことはないと思いました。このキャンプで少し心残りだったことは、自分の思っていることを伝えられなかったことです。今回の体験を通して、異国の人ももっとコミュニケーションが取れるようになりたいと思ったし、色々な価値観を持つ

た人との交流を大事にしていきたいと思えるようになりました。自分にはない考え方をする人の意見を聞くことで、今まで自分になかった考えを持つことにも繋がり、心が豊かになると思います。

一日目の夜にアチボさんの話を聞いて、私たちに問いかけてくれた内容が多くありました。アチボさんは、出身地であるインドの現状について語ってくれました。インドでは女性に対する差別があり、自己決定権がない女性が多くいることを知りました。日本について考えてみると、当り前のように教育を受けられる環境があり、物も揃っていて困ることなどあまりない環境にあります。アチボさんは日本人を見て、何でも物はあるし、困ることもない生活を送っているけれど、「何か足りない、寂しそうに見える」と言っていました。この言葉を聞いて、考えさせられるものがありました。自分自身が何を求めているのか、



台風で倒れた稲を起して束ねる作業

探しているのかを考えるきっかけになったと感じます。私は、自分がやりたいと思っていることに對して、一歩出ずに踏みとどまってしまうことがあります。私は、アジア学院のワークキャンプを通して、行動に移すということが大切だということを感じました。一歩踏み出すことを怖がらずに、前向きに生きていきたいと思いました。アチボさんからももらった問いかけを忘れずに、今後の生活にかしていくと共に、今回のキャン

プを通してこれから自分が何をすることができているかを考え、自分の意志を持ち、ステップアップして

いきたいと思いました。充実した楽しいワークキャンプで参加して本当に良かったです。

アジア学院で学んだこと

英文学科二年 永田 明日香

アジア学院での三日間は短いものだったが、とても貴重な体験ができた三日間だった。一度にあれだけたくさんの方の人達が同じ空間で生活し、同じ食事をとり、一緒に協力して作業をしたりすることは初めてだったし、これからはなかなか経験できることではないと思う。ワークは、コーヒー豆の選別や台風で倒れた稲を起す作業、豚のエサ作り、魚のエサやりとアイガモのエサやりなどたくさん関わる事ができた。でも、自分のたどった道しい英語でも良いから留学生との交流をもっと積極的にすればよかったと思った。豚のエサを作っているときにフィリピン出身の方から耳の痛い質問をされた。それは「なぜ日本の小学生はたくさんご飯を残すのか」「小学生のとき、何キロくらいご飯を捨てていたか」という

ようなものだった。今までそんなことを考えたこともなかったし、もちろん答えられなかった。恥ずかしいのと申し訳ないのとで、相手の顔をまともに見ることができなかった。私達は食べきれないものは捨てるのが当たり前で、捨てるほど食べ物がある環境に暮らしているけれど、それは決して当たり前のことと考えるはいけないのだと考えさせられた。また、アジア学院が大切になっているフードライフワークも、印象に残った。食べ物を食べることは、生き物を殺して命を与えてもらっているという事。自分の命は一つだけれど、その命はたくさんの方から支えられていて、その命から支えられているのだということだ。初めて、食べ物を頂いているのではなく、命を頂いているのだと考えることができた。家に帰った日の夕飯でそのことを思い出して



アジア学院の方々と懇親会

たので、試しにその日の食卓にはいくつかの生き物が上がっているのか数えてみた。魚、鳥、豚、あともう一つは忘れてしまったけれど、全部で四つだった。私はこれだけの、たった一回の食事で四つの命を頂いているのだと感じたら、すごく有り難いと思ったし、全部食べてあげないと申し訳なくて一人でひたすら食べ続けた。アジア学院で経験したことで私の食事に対する見方は少なくとも変わったと思

う。またこれを自分の中だけで留めてしまうのではなく、友人や家族など身近な人達に伝えていくことが大切だと思った。もちろんフードライフワークのこともそうだし、自国のために遠い日本まで農業を学びに来ている人がこんなに多くさん居ること、そういった人達をサポートするアジア学院などのNGO団体が存在することなど、知らない人は多いと思う。こういったことを少しでも多くの人に伝えることが、実際にお邪魔して体験をさせてもらった私達の役割だと思う。ここで書ききれないくらい、経験したことは多いけれど、本当にワークキャンプに参加して良かったと思う。最初は「せっかくの短大生活だし、思い出作りたいな」くらいの軽い気持ちで参加したけれど、人生観が変わるほどの体験になった。ワークキャンプで感じた気持ちを、これからも持ち続けていきたいと思う。

う。またこれを自分の中だけで留めてしまうのではなく、友人や家族など身近な人達に伝えていくことが大切だと思った。もちろんフードライフワークのこともそうだし、自国のために遠い日本まで農業を学びに来ている人がこんなに多くさん居ること、そういった人達をサポートするアジア学院などのNGO団体が存在することなど、知らない人は多いと思う。こういったことを少しでも多くの人に伝えることが、実際にお邪魔して体験をさせてもらった私達の役割だと思う。ここで書ききれないくらい、経験したことは多いけれど、本当にワークキャンプに参加して良かったと思う。最初は「せっかくの短大生活だし、思い出作りたいな」くらいの軽い気持ちで参加したけれど、人生観が変わるほどの体験になった。ワークキャンプで感じた気持ちを、これからも持ち続けていきたいと思う。

短大ギャラリー・ガイド

短大ギャラリーは北校舎の1階です。どうぞお立ち寄りください。



「20th おおる あおやま あーとてん09」
6月30日(火)～7月10日(金)

▶ 11月25日(水)～12月18日(金)

「Art クリスマス AOYAMA in Gallery」

学院宗教センター主催のクリスマスイベントの中の一つです。クリスマスにちなんだ学生作品が並びます。

2010年

▶ 1月19日(火)～1月29日(金)

「家政学科・子ども学科合同 卒業展」

家政学科と子ども学科の卒業制作です。南校舎2階被服構成実習室にも展示があります。

▶ 3月15日(月)～3月19日(金)

「芸術学科 卒業展・修了展」

芸術学科2年生と専攻科生の卒業修了制作を展示します。北校舎1・2階も展示会場になります。



「芸術学科09展」
7月14日(火)～7月24日(金)